

第 126 期定時株主総会 質疑応答要旨

本資料は、2026年6月29日（月）に開催した当社第126期定時株主総会において、株主の皆様から当日いただいた主なご質問と、その回答を要約したものです。

【配当金・配当性向について】

Q1	配当金予想額として6円と示されており、これは「配当性向 30%程度」から算出されていると思うが、一部の会社では配当金の下限値を設定している会社もある。田岡化学もその考え方を導入してはどうかと思うが、見解を伺いたい。
A1	成長への投資と配当金のバランスを勘案して都度配当金を決定している。設備投資で見込まれる費用を考えた際、借入金と自己資本の比率の観点から配当性向 30%程度が将来の成長投資と配当金のバランスを考えた際に適切であると考えている。 また、配当の考え方について、下限値の設定や累進配当というご意見も頂いたが、これについては現時点で完全に否定するものではなく、長期の資金需要の確保、配当の継続性なども踏まえて検討させていただきたい。
Q2	配当金を引き下げるのであれば、PBR の改善を期待したいところではあるが、そのための方策を伺いたい。
A2	PBR の改善については、株価の動向を見ると、やはり業績との連動が大きいことから、早期の業績回復が PBR の改善に繋がると考えている。対外的には今期の営業利益予想約 3 億円と公表しているが、これに留まることなく今期・来期と業績回復に努めていきたい。
Q3	PBR の改善のためには田岡化学の知名度向上が必要と考えるが、方策があれば伺いたい。
A3	決算説明会などの場で、当社はこれまで事業や新規開発製品などのトピックスを取り上げアピールもしてきているが、それ以外の機会にも当社の価値向上に資するものについては積極的にアピールしていきたいと考えている。

【樹脂原料について】

Q1	スマートフォンレンズの先行きが厳しい中で、高機能品の開発に取り組んでいくとの事だが、スマートフォンの価格競争が厳しくなっていく中で、高機能品の開発が競争力の確保に繋がるのか疑問に思うが、見解を伺いたい。
A1	当社はスマートフォン向けレンズの原料（モノマー）の製造を受託している。昨今スマートフォン向けレンズの高機能化が進んでおり、当社顧客からも、モノマーを供給している当社への品質改善の要望が高まっていることから、高機能品の開発に取り組んでいくという方針をご説明申し上げた。

【配当・役員報酬の関係について】

Q1	2026 年度の配当について、当事業年度に比べて大幅な減配予想を打ち出しているが、それに対して役員報酬額はどのような決定をされるのか、伺いたい。
A1	取締役報酬については、基本報酬と業績連動報酬で構成されている。このうち、業績連動部分については、業績に応じたフォーミュラ（計算式）が設定されており、それを当てはめることから（2027 年 6 月に支払われる 2026 年分の）業績連動部分については現状の業績予想をベースとすると大幅な減少となる見込みである(※)。

(※補足：業績連動報酬は前期の業績を基に今期の支給額を計算するため、期ズレが生じます)

【グラフェンナノリボン、ナノパピヨンについて】

Q1	グラフェンナノリボンが今後の精密化学品分野の業績のポイントになると考えているが、中期経営計画期間における今後の見通しを伺いたい。また、名古屋大学との連携状況について伺いたい。
A1	ナノグラフェン、グラフェンナノリボンは精密化学品部門に含まれる製品ではあるが、現状では売り上げに占める比率は、未だ小さいものとなる。 名古屋大学との共同研究については現在も継続しており、また、最近発表したシンチレーターの特許出願については同じ名古屋大学の別の研究室との共同研究の成果となる。現在はこれら成果を基に、研究所（公的研究機関）や企業等への紹介を進めて、実際に使えるのか、商品化できるのかの検討を進めている段階であり、発表できる段階に進んだら適宜公表させて頂きたい。
Q2	「ナノパピヨン」とグラフェンナノリボンの関係を詳しく伺いたい。
A2	グラフェン（ベンゼン環が無数に連結した構造を持つ物質）のうちナノサイズのもの総称をナノグラフェンという。グラフェンナノリボンは、このナノグラフェンの中でリボンのように細長い構造を有するものを指し、ナノグラフェンの1カテゴリーに分類される。 「NanoPapillon（ナノパピヨン）」は当社の登録商標。当社が名古屋大学との共同研究の中で、ナノグラフェンの新しい合成法である APEX 反応を用いて化合物をいくつか作り出し、これらが他社品や天然物（黒鉛）から作られるものと比べて高純度であることから、「Nano Papillon（ナノパピヨン）」という商標を付してご紹介し、差別化を図っている。

以上